

効力のほうが友人数といった客観的指標と密接な関係があることが明らかである。

本研究における仮説は、「性格特性概念（社会的内向性・思考的内向性）よりも、自己効力のほうが、友人数をよりよく予測するであろう。」というものであった。これらの結果を総合すれば、本仮説は、検証されたと考えられる。

本研究においても、問題点がなかったわけではない。たとえば、尺度内容のさらなる検討が必要である点、矢田部・ギルフォード性格検査を使用した点、信頼性がかなり低いものであった点、など多くの問題点が残されている。

さらなる検討が必要であるといえよう。

[引用文献]

Bandura, A. 1977 *Social learning theory*. New Jersey: Prentice Hall (原野広太郎 監訳 1979 社会的学習理論 金子書房)。

Bandura, A. 1986 *Social foundations of thought and action: a social cognitive theory*. New York: Prentice-Hall.

Eysenck, H.J. 1947 *Dimensions of Personality*. London: Routledge & Regan Paul.

Jung, C.G. 1923. *Psychological types*. New York: Harcourt.

国立大学等保健管理施設協議会 1997「学生の健康白書 1995」学生の健康白書作成に関する特別委員会

岡本栄一 1970「第3章 人格類型論・因子論的展開」佐治守夫(編)講座心理学第10巻 東京大学出版会、P. 113-122.

鈴木由美 1997 女子大学生の友人獲得に及ばず自己効力とスキルの効果 筑波大学教育研究科修士論文(未公刊)

鈴木由美・藤生英行・田上不二夫 1998(投稿中)女子大学生の友人獲得に及ばず自己効力とスキルの効果 カウンセリング研究

一谷 彊 1991「8章Ⅱ. 内向性—外向性と学習・記憶」浜 治世(編) 現代基礎心理学第8巻 東京大学出版会、P. 198-212.

鈴木由美(職員・カウンセラー)

藤生英行(筑波大学心理学系)

田上不二夫(筑波大学心理学系)

Table10 10月の友人数についての上位下位分析結果

	人 数	平 均	SD	df	t 値
社会的内向性	264	7.64	3.14	515	-0.99
	253	7.90	2.93		
思考的内向	264	10.00	3.84	517	-0.98
	254	10.33	3.56		
自己効力	244	36.11	6.00	475.3	2.33*
	244	34.71	7.21		
気づかいスキル	248	18.32	3.14	496	0.39
	250	18.21	3.45		
かわりスキル	248	15.56	2.56	497	0.92
	250	15.34	2.76		

各セルの上段は上位群の数値、下段は下位群の数値  
\* :  $p < .05$

SDは、Table10に掲載されている。

それぞれの尺度について、上位群下位群間の平均値の差を t 検定によって検討したところ、Table10のようになった。

その結果、自己効力のみが有意差を示した ( $t=2.327$ 、 $df=475.3$ 、 $p<.05$ )。10月友人数の上位群は、自己効力得点（平均36.11、SD6.00）が、下位群（平均34.71、SD7.21）よりも有意に高かった。

### [考 察]

本研究の目的は、自己効力と社会的内向性、思考的内向性のいずれが友人数をよりよく予測するかを検討することであった。Banduraの自己効力理論からすれば、社会的内向性や思考的内向性といった性格特性変数よりも、自己効力のほうが友人数を予測できると予想される。

本研究の結果によれば、4月および10月の友人数と相関が有意であった尺度は自己効力および気づかいスキルであり、社会的内向性、思考的内向性はいずれも有意でなかった。偏相関についても、他の変数を統制しても、自己効力の相関が有意であったのに対して、社会的内向性および思考的内向性については有意ではない場合が多く一貫していない。

10月の友人数について、上位下位分析を行ったところ、各尺度のうち t 検定において平均値に有意差がみられたのは自己効力のみであった。

以上の点を考慮すれば、社会的内向性、思考的内向性といった性格特性変数よりも、自己

いる。4月の友人数との相関が有意になったものは、自己効力 ( $r=.19$ ,  $p<.01$ )、かかわりスキル ( $r=.12$ ,  $p<.05$ ) のみであった。10月の友人数との相関が有意になったものは、自己効力 ( $r=.14$ ,  $p<.01$ ) のみであった。

思考的内向得点について統制した、友人数と各尺度間の相関係数は、Table 8 に示されている。4月の友人数との相関が有意になったものは、自己効力 ( $r=.19$ ,  $p<.01$ )、かかわりスキル ( $r=.12$ ,  $p<.01$ ) であった。10月の友人数との相関が有意になったものは、自己効力 ( $r=.14$ ,  $p<.01$ ) のみであった。

自己効力について統制した、友人数と各尺度間の相関係数は、Table 9 に示されている。4月の友人数との相関が有意になったものは、気づかいスキル ( $r=.12$ ,  $p<.05$ ) のみであった。10月の友人数との相関が有意になったものは、社会的内向性 ( $r=-.10$ ,  $p<.05$ ) のみであった。

#### 4. 10月の友人数の上位下位分析

友人数と各尺度との関係をさらに検討するため、10月の友人数について、上位50% (9人以上) 下位50% (8人以下) を基準に上位群下位群に分けた。各群における、各尺度の平均、

Table 8 思考的内向について統制した、各尺度の偏相関係数

	4月 友だちの人数	10月 友だちの人数	自己効力	社会的内向	気づかいスキル
10月友だちの人数	.387**				
自己効力	.188**	.144**			
社会的内向	-.097	-.102	-.086		
気づかいスキル	.113	.030	-.024	-.013	
かかわりスキル	.124**	.046	.234**	-.030	.539**

\* :  $p<.05$     \*\* :  $p<.01$

Table 9 自己効力について統制した、各尺度の偏相関係数

	4月 友だちの人数	10月 友だちの人数	社会的内向	思考的内向	気づかいスキル
10月友だちの人数	.367**				
社会的内向	-.072	-.104*			
思考的内向	.039	-.069	.224**		
気づかいスキル	.118*	.036	-.024	-.040	
かかわりスキル	.083	.014	-.014	-.020	.560**

\* :  $p<.05$     \*\* :  $p<.01$

Table 6 各尺度間の相関係数

	4月 友だちの人数	10月 友だちの人数	社会的内向	思考的内向	自己効力	気づかいスキル
10月友だちの人数	.370**					
社会的内向	-.061	-.100				
思考的内向	.039	-.083	.237**			
自己効力	.193**	.133*	-.078	.000		
気づかいスキル	.919	.035	-.035	-.005	-.035	
かわりスキル	.124	.059	-.035	.001	.258**	.529**

\* :  $p < .05$     \*\* :  $p < .01$ 

相関であった。思考的内向性、社会的内向性については、相関は有意ではなかった。

### 2. 6ヶ月後（10月）の友人数と各尺度間の関係

10月の友人数と各尺度間との関連を検討する。自己効力、気づかいスキル、かわりスキル、思考的内向性、社会的内向性それぞれの尺度および、友人数との関係を検討するため、各尺度間の相関係数が算出された（Table 6）。それぞれの尺度間との関係は、Table 6 に示されている。

10月の友人数と各尺度間で有意となった相関は、自己効力 ( $r = .13, p < .01$ ) のみであった。弱い相関ながら、自己効力のみが相関があった。思考的内向性、社会的内向性については、相関は有意ではなかった。

### 3. 友人数と各尺度との偏相関係数について

次に、ある尺度得点の影響を排除した偏相関について検討する。偏相関係数を利用することで、各変数の影響をとりぞいた純粋な関係について検討することができる。

社会的内向得点について統制した、友人数と各尺度間の相関係数は、Table 7 に示されて

Table 7 社会的内向について統制した、各尺度の偏相関係数

	4月 友だちの人数	10月 友だちの人数	思考的内向	自己効力	気づかいスキル
10月友だちの人数	.377**				
思考的内向	.057	-.045			
自己効力	.186**	.136**	.009		
気づかいスキル	.110	.030	-.037	-.025	
かわりスキル	.121*	.044	-.015*	.232**	.539**

\* :  $p < .05$     \*\* :  $p < .01$

### (5) 友人数についての質問

現在の友人数について、「仲の良い女性（同性）の友だちは何人いますか」との質問に回答させた。回答形式は、数字を直接記入させるものであった。

#### 3. 手続き

4月の入学オリエンテーションの会場において、質問紙を配布して、集団で実施された。得られた回答のうち記入もれやミスのあったものを除き、有効回答数者合計631名（大学生226名、短大生405名）のデータを分析対象にした。友人数に関しては、4月とその6ヶ月後の2回にわたって実施された。6ヶ月後（10月）の調査では、授業時間を利用して実施された。有効回答数は、560名であった。

## [結 果]

### 1. 尺度構成

社会的内向性および思考的内向性尺度の各項目の平均と標準偏差は、Table 1 に示した。

2つの尺度それぞれについて、 $\alpha$ 係数を算出したところ、社会的内向性では.46であり、思考的内向性では.64となり、十分な信頼性があるとはいえない結果となった。

また、2つの尺度全項目を一緒にして、因子分析をおこなったところ、解釈が困難であった。そのため、各尺度ごとにI-T相関値などを参考に項目を取捨し、尺度構成をし直すこととした。

社会的内向性では、項目Q13、Q19を除くと $\alpha$ 係数が.53となり、ある程度の信頼性が得られることとなった。尺度平均は6.91であり、尺度のSDは2.85となった。

同様に思考的内向性では、項目Q2、Q18を除くと $\alpha$ 係数が.69となり、ある程度の信頼性が得られることとなった。尺度平均は9.27であり、尺度のSDは3.46となった。

今後の分析には、この最終的な尺度を用いることとした。

自己効力・友人形成スキルについての尺度構成は、鈴木（1997）参照のこと。

### 2. 4月の友人数と各尺度間の関係

4月の友人数と各尺度との関連を検討する。自己効力、気づかいスキル、かかわりスキル、思考的内向性、社会的内向性それぞれの尺度および、友人数との関係を検討するため、各尺度間の相関係数が算出された（Table 6）。それぞれの尺度間の関係は、Table 6 に示されている。

4月の友人数と、各尺度との間で有意となった相関は、自己効力（ $r=.19$ ,  $p<.01$ ）、かかわりスキル（ $r=.12$ ,  $p<.01$ ）の二つであった。弱い相関ながら、自己効力のほうが高い

Table 3 自己効力項目の内容、平均、標準偏差、IT相関および $\alpha$ 値（N=631）

項目	内容	平均	標準偏差	I-T相関
Q1	友だちはすぐできると思う。	2.977	0.755	0.683
Q2	友だちを作るには苦勞しそうだ。	2.469	0.831	0.647
Q3	特に意識しなくても友だちは作れそうだ。	2.637	0.756	0.689
Q4	友だちを作らなければと思うと気が重い。	2.183	0.881	0.551
Q5	いつも通りやっていれば友だちはできる。	3.060	0.675	0.641
Q6	友だちを作るには努力が必要だ。	2.659	0.801	0.552
Q7	友だちと仲良くするのは簡単だ。	2.662	0.716	0.699
Q8	人と知り合うことがごく自然にできる。	2.700	0.765	0.720
Q9	全く知らない人でも話しができる。	2.778	0.816	0.622
Q10	友だちとの話題はすぐ見つけられる。	2.628	0.708	0.646
Q11	友だちとの話しはつきない。	2.733	0.784	0.551
Q12	友だちと一緒にいても気にならない。	3.014	0.738	0.485
Q13	人と一緒にいると緊張する。	2.130	0.797	0.496

 $\alpha = .903$ Table 4 気づかいスキル項目の内容、平均、標準偏差、IT相関および $\alpha$ 値（N=631）

項目	内容	平均	標準偏差	I-T相関
Q1	挨拶に気がつかった。	2.704	0.831	0.385
Q7	相手を傷つけないように気がつかった。	3.327	0.701	0.503
Q8	楽しい雰囲気になるように気がつかった。	3.251	0.751	0.663
Q9	明るくふるまった。	3.114	0.830	0.621
Q10	共通の話題を見つけて話すようにした。	3.114	0.778	0.530
Q12	特に何もしなかった。	2.218	0.964	0.396

 $\alpha = .764$ Table 5 かかわりスキル項目の内容、平均、標準偏差、IT相関および $\alpha$ 値（N=631）

項目	内容	平均	標準偏差	I-T相関
Q2	積極的に自分から話しかける。	3.088	0.772	0.520
Q3	冗談を言って笑わせた。	2.766	0.826	0.453
Q4	一緒に昼食を食べるようにした。	3.274	0.789	0.465
Q6	困っている時は相談にのった。	3.450	0.701	0.466
Q11	心を打ちあげた。	2.913	0.817	0.431

 $\alpha = .709$

Table 1 社会的内向性項目の内容、平均、標準偏差、IT相関および $\alpha$ 値 (N=631)

項目	内容	平均	標準偏差	I-T相関
*Q1	色々な人と知り合いになるのが楽しみである	0.420	0.792	0.228
Q3	知らぬ人と話すときはかたくなる	1.144	0.792	0.258
Q5	こちらから進んで友だちを作ることが少ない	0.942	0.634	0.318
Q7	人目にたつようなことは好まない	1.065	0.844	0.299
Q9	男の友だちはほとんどできない	0.968	0.752	0.370
*Q11	人と広く付き合うのがすきである	0.646	0.875	0.129
*Q13	誰とでもよく話す	0.883	0.856	
Q15	新しい友だちはなかなかできない	0.885	0.617	0.273
Q17	無口である	0.881	0.551	0.118
*Q19	人中出现てもまごつかない	1.086	0.764	

\*は逆転項目である。

 $\alpha = .526$ Table 2 思考的内向性項目の内容、平均、標準偏差、IT相関および $\alpha$ 値 (N=631)

項目	内容	平均	標準偏差	I-T相関
Q2	むずかし問題を考えるのがすきである	0.845	0.656	
Q4	一人っきりでいたいと思うことが時々ある	1.374	0.777	0.256
Q6	人のすることの裏を考えることが多い	0.974	0.668	0.291
Q8	実行する前に考えなおしてみることが多い	1.306	0.788	0.351
Q10	会話の最中にふと考え込むくせがある	1.081	0.706	0.449
Q12	何でもよく考えてみないと気がすまない	1.020	0.760	0.389
Q14	用心深いたちである	1.219	0.812	0.475
Q16	たびたび考え込むくせがある	1.145	0.766	
*Q18	のんきなたちである	0.446	0.739	0.489
Q20	深く物事を考える傾向がある	1.161	0.825	

\*は逆転項目である。

 $\alpha = .692$ 

## (4) 友人形成スキルの尺度

友だちを作るための方法を行なっているかどうかを問うもので、気づかいスキル尺度 (Table 4) とかかわりスキル尺度 (Table 5) 各7項目ずつからなる尺度を使用した (鈴木、1997)。回答方法は各項目とも4件法(まったくそう思わない~とてもそう思う)であった。採点に際しては、「まったくそう思わない」に1点、「あまりそう思わない」に2点、「すこしそう思う」に3点、「とてもそう思う」に4点を与えた。

気やうち解けた人を対象には外向的に振る舞うことがある。このように人が場面に応じて行動することが明らかであり、いつでもどこでも人は一貫して行動するという性格特性という考え方には無理があると考えられる。

Banduraは、これらの性格特性概念よりも、自己効力といった場面に応じた期待が行動へ及ぼす効果の役割を強調している。

本研究の目的は、自己効力やスキルと、性格特性のどちらが、友人獲得に大きな影響を与えるのかを検討することである。

Banduraの自己効力理論からすると以下の仮説がたてられる。

仮説 性格特性概念（社会的内向性・思考的内向性）よりも、自己効力のほうが、友人数をよりよく予測するであろう。

## [方 法]

### 1. 調査対象

女子大学生及び短期女子大学生1年生688名を対象にした。

### 2. 質問紙

質問紙は以下の尺度項目を使用した。

#### (1) 社会的内向性尺度

矢田部・ギルフォード性格検査項目から社会的内向性に関する10項目を利用した（Table 1）。回答方法は、各項目とも3件法（いいえ、わからない、はい）であった。採点に際しては、検査の採点方法を参考に「いいえ」を0点、「わからない」を1点、「はい」を2点とした。

#### (2) 思考的内向性尺度

矢田部・ギルフォード性格検査項目から思考的内向性に関する10項目を利用した（Table 2）。回答方法は、各項目とも3件法（いいえ、わからない、はい）であった。採点に際しては、検査の採点方法を参考に「いいえ」を0点、「わからない」を1点、「はい」を2点とした。

#### (3) 友人獲得の自己効力尺度

友だちを作ることができるかに関する自己効力を問うもので、13項目から構成され（Table 3）、回答方法は各項目とも4件法（まったくそう思わない～とてもそう思う）であった。採点に際しては、「まったくそう思わない」に1点、「あまりそう思わない」に2点、「すこしそう思う」に3点、「とてもそう思う」に4点を与えた。



ルよりも6ヶ月後の友人数をよく予測する結果が確認された。

さて、従来からの研究において、友人獲得といった対人関係に大きく関係がある概念として扱われているものに、性格特性がある。

性格は、一般的に人の性格は短気だとか礼儀正しいというような特徴を示すことばによって記述される。このような特徴には、その場限りで他の場面には現れなくなるものもあるが、さまざまな状況を通して一貫して現れる一定の行動傾向がある。このような行動傾向を性格特性 (personality trait) と呼ぶ。

Jung (Jung, 1923) は、一般的な心的エネルギーが働く方向が主として客体に向かうか、主体に向かうかによって、外向・内向の二つの機制を認めた。外向事態では外界の事物に関心に向け、思考、感情、行動が外界に対して働き、内向事態では外界よりも自己自身に対する関心が強く、内的世界の中で思考したり空想したりする。

外向型 (extrovert) の特徴は、情緒の表出が自由で活発、気分の流動がはやく、物事にこだわらない。あっさりしていて、あきらめもはやく、陽気で心配することが少ない (感情的側面)。精力的で独立心が強く、統率の才能がある。広い範囲の人と交際し、流暢な弁舌と巧みな機知を持って明るく談笑することを好む。

内向型 (introvert) の特徴は、情緒の表出は控えめで、気分の変化は少ない。内気で気むずかしく、心配がちである。実行力は乏しいが思慮深く、やりはじめたことを良心的に粘り強く行う。他人とはいろいろな交渉を持つことを好まない。交友範囲は狭く、友人を作るのが困難である。他人からの批判や意見に敏感で、これによって感情を傷つけられやすい。

Jungの考え方は、性格をパターン分けする類型論に属する性格理論であるが、Eysenck (1947) は、類型論を性格特性理論へと因子分析法などを使って統合した。

さて、自己効力概念を打ち出した、Bandura (1977, 1986) は、このような性格特性について否定的な考え方をしている。

なぜなら、その循環的定義の性質、およびある性格特徴の人は、場面を越えて一貫して行動するという性格特性の考え方に矛盾があるからだとしている。

循環的定義とは、性格特性を定義するのに、行動を記述する用語を用いているのに対して、この行動を記述する用語を用いて行動の予測を行おうとするものであることを指す。この考え方からすると、行動から性格特性が記述され、性格特性から行動を予測することになり、矛盾した考え方となる。

また、性格特性理論においては、ある性格特性を持つものは、場面を越えて一貫して行動することが仮定されている。しかし、社会的に内向的な人であっても、受け入れられた雰囲気

## 女子大学生の友人数におよぼす自己効力と性格特性 (社会的内向性・思考的内向性)の影響について

鈴木 由美、藤生 英行、田上 不二夫

### 〔問題〕

女子大学生のカウンセリングにおいては、対人関係とくに同性友人関係を問題に相談に来るケースがよく見られる。平成9年度の本学のカウンセリング来室者統計によると相談者(285人)の25.2%(72人)が友人関係の悩みであった。国立大学保健管理施設協議会が発行している「学生の健康白書1995」(1997)によると大学生の相談内容で主要なものは、精神的な問題を除いては、男子では学業のこと、女子では対人関係の悩みになっている。

対人関係の問題に直接関係するものとしては、大学に入ってから新しい友人関係の獲得が大きな問題となる。

このような友人獲得を規定する要因には、次のような3つのものが考えられた(鈴木、1997、1998)。すなわち、自己効力、気づかいスキルとかかわりスキルである。

鈴木(1997、1998)は、友人を作ることができるという期待、すなわち友人獲得に関する自己効力(以下、自己効力と略す)、および友人獲得に関するスキルが、実際の友人数と関係があると考え、調査研究を行った。友人獲得に関するスキルは、因子分析の結果、2つの下位スキル(気づかいスキルとかかわりスキル)から構成されることが確認された。自己効力は、6ヶ月後の実際の友人数と有意な相関があった。また、自己効力得点の上位のものと下位のものでの友人数を比較した結果、自己効力の高いものが低いものよりも、友人数が有意に多いことがt検定によって確認された(1%水準)。

それに対して、気づかいスキルとかかわりスキルは両方とも、6ヶ月後の実際の友人数とは有意な相関が認められなかった。さらに、気づかいスキル得点とかかわりスキル得点それぞれについて、上位のものと下位のものにわけ友人数を比較した結果、友人数については、t検定の結果、有意差がみられなかった。

このように、鈴木(1997、1998)によれば、自己効力が、気づかいスキルやかかわりスキ